

松ヶ岡(旧山崎家住宅)

掛川市教育委員会
社会教育課 文化財係

○山崎家について

山崎家は伊達方寺ヶ谷から出ており、油商で財を成し、西町に移り住み万右衛門(まんえもん)を名乗ったのが始まりです。約150年前に現在の場所に移りました。後に葛布問屋として栄え、掛川藩御用商人を勤めました。当主は6代目まで代々万右衛門を名乗っています。

4代目山崎万右衛門(号は晨園(しんえん)、以善堂(いぜんどう)主人とも名乗りました。)は、掛川藩御用商人として、掛川藩だけでなく横須賀藩や浜松藩などにもお金を用立てていました。苗字帯刀を許され、掛川藩藩校教授で儒学者の松崎慊堂(まつざき-こうどう)とも親交がありました。

7代目山崎徳次郎は明治維新期の当主で、掛川藩の負債整理により、多くの土地を取得し、県内第2位の納税者になっています。

8代目山崎千三郎は、大井川疎水の計画、測量や、鉄道を東海道筋に通すために尽力するなど、社会の発展に貢献しました。明治11(1878)年には松ヶ岡が明治天皇の宿泊所(行在所(あんざいしょ))になり、建物の改修を行いお迎えしました。

また、千三郎の甥にあたる山崎覚次郎は、冀北学舎に学び、東京帝国大学卒業後、従兄弟の丘浅次郎と共にドイツに留学し、日本の金融論、貨幣論の先駆的な研究をした経済学者です。また、東京帝国大学名誉教授、東宮職御用係として皇室の国際金融問題顧問を務めました。

○松ヶ岡(旧山崎家住宅)について

安政の大地震(1855)で建築中の建物が倒れ、そのすぐ後に建築されたと言われています。その後、何回かの改修、増築が行われ現在に至っています。

古い部分で約100坪、奥の新しく改修、増築した部分が約80坪あります。

明治天皇の宿泊所となったことから、終戦まで聖蹟として文部大臣指定史跡となっていました。今でもそのことを記す石碑や石柱が残っています。

建築から約150年がたっていますが、主な部分はしっかりしています。使用した木材や建築技術が優れていたことを示すとともに、それらを揃えることができた山崎家の財力の大きさを伺うことができます。

玄関の屋根は銅板葺きで、式台には桜の一枚板が使われています。身分の高い人を迎えるときだけに使われました。

廊下には畳が敷かれ、長押(なげし)は一続きの杉面皮(皮付きの杉の木)が使われています。一番長いもので約9mあり、高価な木材です。

客間、次の間の柱はすべて檜が使用されています。床の間の柱も檜が使われ、框（かまち）は漆が塗られています。壁は紙を張る張付壁で、来客に合わせ張り替えたと言われています。次の間との境にある欄間には、見事な松の彫刻があります。

浴室等は、明治天皇をお迎えするにあたり、改修の指示が出ていました。浴室には4畳半の前室、3畳の脱衣所が付いており、風呂桶は一間（約1.8m）四方の大きなものでした。

手洗いには、当時としては斬新なデザインの大きな鏡が掛けられています。

奥の間に続く廊下の天井はアーチ状になっており、曲げた材木で作られています。手間の掛かる仕事で、角のつなぎ目もきれいに仕上げられており、作成した大工の技術の高さが伺えます。

奥の間の柱は、すべて四方柱目の檜が使用されています。木目が細かいので、寒い地方でとれた木材で、大変高価なものです。また、この部屋は天井が高く、造りも大きくなっています。障子は質素な造りに見えますが、棧はすべて面取りされているなど、手間を掛けているのがわかります。床の間の板は松、框には楓（かえで）が使われています。

現在の台所は、使いやすくするために床が張られましたが、元々は土間で、使用人が食事をする場所だけに畳が敷かれていました。ガスコンロに取り替えられましたが、かまどの跡も残っています。

○長屋門

間口8間、梁間2間、入母屋造りの長屋門で、屋根は瓦葺き、外壁の下半分には杉の板が張られ、上半分は漆喰（しっくい）が塗られています。

○庭について

十数本のアカマツの大木が植えられており、松ヶ岡の由来となっています。その他にも、クス、スギ、シイ、ツツジ、カエデなどの樹木が植えられています。また、多くの石灯籠が置かれ、枯山水や池なども作られています。もともと屋敷周りには堀がめぐらされており、増築の時に西側を池にしたと考えられています。今でも池と堀とはレンガのトンネルでつながっています。

沓脱（くつぬぎ）には鞍馬（くらま）石が使われています。鞍馬石とは京都市鞍馬山で産出する石で、庭石によく用いられます。通常鉄さび色をしていて、自然石のまま用いられます。

以上は、現時点で松ヶ岡（山崎家）について分かっていることを解説しています。今後、さらに様々な調査・研究を実施していきます。